

第 17 回北日本頭頸部癌治療研究会

プログラム抄録集

期　日：平成 23 年 10 月 22 日（土）13 時 30 分より

場　所：仙台市医師会館・急患センター5 階

〒984-0806 仙台市若林区舟丁 64-12

TEL 022-266-6561

参加費：5,000 円

受付にて日本耳鼻咽喉科学会
学術集会参加報告票をご提出下さい。

会長挨拶

この度、第 17 回北日本頭頸部癌治療研究会を岩手医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科で担当させていただきます。

昨年の世話人会で、今回のテーマは 2000 年の第 6 回と同じ「上咽頭癌」とすることに決定されました。上咽頭癌はご存知のように日本人には少ない癌で、自身の経験では京都大学、岩手医科大学いずれの施設でも 10 年間に 20~30 例程度にすぎません。私ごとで恐縮ですが、1987 年に上咽頭癌の耳管機能を調査する目的で台湾大学に滞在していた当時、台湾大学の 1206 例（5 年間）の成績が 5 生率 70.8% と聞き、その好成績に大変驚いたことを記憶しております。その際に IV 期の比率が京都大学で 85% であるのに対して台湾大学では 53% と少なく、台湾ではレジデントでも後鼻鏡の観察がとても上手で I 期の癌が 6% も発見されることを知り納得いたしました。当時に比べ、様々な診断手技が開発された今日、本会に参加している各施設で初診時の staging がどのような状況にあるのか大変興味のあることころです。また、上咽頭癌は他の頭頸部癌と異なり、放射線治療と化学療法が治療の gold standard であり、各施設の治療内容に大きな variation はないと思われます。その意味で今回のテーマも参加 12 施設のデータを論文にまとめて発表できればと考えております。

さて、本研究会は各施設の発表者によるパネルディスカッションの後、主題に関するエキスパートの特別講演を拝聴するのが恒例でありました。今回は横浜市立大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座 佃 守教授に特別講演をお願いしておりましたが、大変悲しいことに先生は 9 月 22 日に急逝されました。心からお悔やみ申し上げますと同時に今回の特別講演は中止とせざるを得ないと判断致しましたことをご報告致します。

当初、東日本大震災のため仙台での開催を懸念しておりましたが、無事開催の運びとなりました。「がんばろう東北」の心意気で充実した発表、熱い討論をお願いできればと期待しております。最後に特別講演の中止に伴い、懇親会を 1 時間早めますので 1 人でも多くの参加をお待ちしております。

第 17 回北日本頭頸部癌治療研究会会長
岩手医科大学医学部耳鼻咽喉科・頭頸部外科 佐藤宏昭

プログラム

テーマ『上咽頭癌』

パネルディスカッション（13：30～16：30）

司会 志賀 清人 先生

- 1) 福島県立医科大学 西條 聰 先生
「当科における上咽頭癌治療成績」
- 2) 山形大学 古川 孝俊 先生
「当科における上咽頭癌症例の検討」
- 3) 仙台医療センター 森田 真吉 先生
「当科における上咽頭癌の検討」
- 4) 宮城県立がんセンター 浅田 行紀 先生
「当科における過去 10 年間の上咽頭がん症例の検討」
- 5) 東北大学 石田 英一 先生
「当院における上咽頭癌の検討」
- 6) 岩手医科大学 阿部 俊彦 先生
「当科における上咽頭癌症例の検討」
- 7) 秋田大学 小泉 洸 先生
「当科における上咽頭癌の治療成績」
- 8) 弘前大学 阿部 尚央 先生
「弘前大学における上咽頭癌の治療成績」
- 9) 北海道がんセンター 洲崎 真吾 先生
「北海道がんセンターにおける過去 10 年間の上咽頭癌治療の検討」
- 10) 札幌医科大学 黒瀬 誠 先生
「当科における上咽頭癌症例の検討」
- 11) 北海道大学 土屋 和彦 先生
「北海道大学病院における上咽頭癌の治療～10 年間 (2000-2010) のまとめ」
- 12) 旭川医科大学 高原 幹 先生
「当科における上咽頭癌の治療成績」

パネルディスカッション

1. 当科における上咽頭癌治療成績

福島県立医科大学医学部耳鼻咽喉科

西條 聰 松塚 崇 國井美羽

鈴木政博 野本幸男 横山秀二 大森孝一

当科では 1999 年 4 月から Stage II 以上の上咽頭癌新鮮例に対して化学放射線交替療法 (5-FU/CDDP:3 クール・放射線照射 total 66Gy 併用期間なし。) を行っている。2010 年 4 月までの 11 年間に当科で交替療法を行った上咽頭癌新鮮例は 30 例であった。症例全体の完遂率、奏効率、5 年生存率を算出し他施設との比較検討を行った。また非完遂例の治療断念時の理由、CR が得られなかった患者の原因を追跡し、今後の交替療法の更なる成績向上のための検討を行った。入院時の病期は II A : 2 例、II B : 4 例、III : 9 例、IV A : 5 例、IV B : 5 例、IV C : 5 例であった。完遂率は 93.3% (30 例中 28 例)、奏効率は 100% であった。また全体の 5 年粗生存率は 78.3%、Stage 分類別では Stage II : 100%、Stage III : 75%、Stage IV : 73.8% であった。交替療法非完遂例である 2 例の治療断念時の理由としてはそれぞれ WBC 減少、中途で CR となったことがあげられ、化学療法と放射線照射の時間間隔の調整や早期 CR となった患者への対応が重要であると考えられた。CR が得られなかった 3 例はいずれも PR であったが、3 例中 2 例が Stage IV C で遠隔転移巣への治療にて死亡していた。検討項目を実践させることにより、交替療法は身体へ及ぼす侵襲性・治療効果・予後の 3 点から今後も良好な結果が期待できる。

2. 当科における上咽頭癌症例の検討

山形大学医学部耳鼻咽喉・頭頸部外科

古川孝俊、小池修治、那須 隆、石田晃弘、野田大介、栗田 悠、欠畠誠治

上咽頭癌は、解剖学的特徴により放射線治療が選択される場合が多い。早期例では放射線単独で、進行例では化学放射線療法が選択される場合が多い。近年の白金製剤を中心とした化学放射線療法の導入により、進行例の治療成績が改善傾向にある。2001 年に不破らは、CDDP と 5FU を用いた化学放射線交替療法を行った 32 例について 5 年粗生存率 75%、無病生存率 65% と非常に良好な成績を報告し、concurrent chemotherapy と遜色ない結果であった。化学放射線交替療法は、concurrent chemotherapy と比較して、粘膜炎を主とする急性期障害を軽減できる一方、放射線治療期間中の中断による制御率の低下や、総治療期間の延長が問題となる。

当科でも、不破らの報告に準じ、2000 年より CDDP と 5FU を用いた化学放射線交替療法を導入している。今回、その治療成績を中心に報告する。1999 年から 2009 年までに当科で加療を行った上咽頭癌症例は 17 例である。男性 11 例、女性 6 例で、平均年齢は 59.1 歳である。Stage 分類は、stage I が 2 例、stage II A が 1 例、stage II B が 4 例、stage III が 3 例、stage IV A が 6 例、stage IV C が 1 例である。症例数が少ないが、交替療法を行った症例の 5 年累積生存率・粗生存率は 88.9% であった。

3. 当科における上咽頭癌の検討

仙台医療センター耳鼻咽喉科

森田真吉 館田勝 中目亜矢子 天野雅紀 橋本省

当科における上咽頭癌の臨床検討を行った。対象は 1996 年 1 月 1 日から 2011 年 3 月 31 日までに当院で入院加療を行った 15 例である。内訳は男性 9 例、女性 6 例、年齢は 40~87 歳（平均 68.7 歳）、2005 年頭頸部癌取扱い規約による病期分類では II B 期 1 例、III 期 9 例、IVA 期 5 例であった。病理組織学的分類は、角化型扁平上皮癌（WHO-I 型）3 例、非角化型癌（WHO-II 型）8 例、未分化癌（WHO-III 型）4 例であった。治療は放射線療法単独が 5 例、化学療法併用放射線治療 10 例、内 4 例に頸部郭清が行われた。経過観察期間は 3~126 か月（平均 58.7 か月）であった。Kaplan-Meier 法による 5 年粗生存率は 53%、疾患特異的 5 年生存率は 57% であった。

4. 当科における過去 10 年間の上咽頭がん症例の検討

宮城県立がんセンター

浅田行紀、嵯峨井俊、今井隆之、斎藤大輔、松浦一登

(対象) 2001 年 1 月 1 日から 2010 年 12 月 31 日まで当科を受診した上咽頭がん患者 32 例を対象とし、その病期、治療内容、治療成績について検討した。(結果) 男性 27 例、女性 5 例、平均年齢 58.9 歳であった。一次症例 31 例、二次症例 1 例であった。病期は、stage I : 4 例、II : 2 例、III : 6 例 IV : 20 例 (A : 10 例, B : 6 例, C : 4 例) であった。治療態度では 29 例は根治治療を行い、3 例は姑息もしくは治療を行わなかった。治療手段は根治治療の症例 29 例中 24 例が化学放射線療法施行し、放射線治療単独が 4 例、手術単独が 1 例であった。根治治療を行った症例の化学療法のレジメンは 7 例がシスプラチニン、5FU (PF 療法) を放射線と同時に施行、6 例が PF 療法を放射線治療を交互に使う交代療法、11 例がシスプラチニン単剤 (80 mg/m^2 3 クール) を放射線療法と同時併用後に地固め療法として PF2 クール行っていた。全症例の 5 年生存率は 47.0% であり、stageI から IVA までの症例では 5 年生存率が 67.0% であるのに対し stageIVB, C 症例の 5 年生存率は 0% (50% 生存期間 218 日) であった。(結語) 上咽頭がんに対する当科の治療方針は 10 年間シスプラチニンを中心とした化学放射線療法であった。StageIVB, IVC の治療成績が非常に悪く、検討する必要があると考えられた。

5. 当院における上咽頭癌の検討

東北大学病院 耳鼻咽喉・頭頸部外科

石田英一、加藤健吾、志賀清人、小川武則、高梨芳崇、石井亮、小林俊光

2000 年～2010 年までの 11 年間に当院で一次治療を行った上咽頭癌 46 症例を対象に後ろ向き研究を行った。対象の内訳は年齢 25～81 歳（中央値 59 歳）、男性 35 例、女性 11 例（男女比 3.2 : 1）、performance status は 0～1 が 40 例と大半を占めた。病期（頭頸部癌取扱い規約改定第 4 版（2005 年）による）は I 期：1 例、IIA 期：4 例、IIB 期：9 例、III 期：18 例、IVA 期：8 例、IVB 期：4 例、IVC 期：2 例であった。病理組織型は扁平上皮癌が 23 例、NPC、未分化癌ないしリンパ上皮癌と診断されたものが 23 例と半数ずつ見られた。当院では原則として一次治療は放射線科にて行っており、対象期間を通じて CDDP+5-FU 併用の同時化学放射線療法を行った。全体の 5 年生存率は粗生存率、疾患特異的生存率共に 61.3%、病期別では I 期：100%、II 期：92.3%、III 期：59.3%、IV 期：30.8% であった。再発は 21 例（45%）に認め、頸部リンパ節再発に対しては手術、遠隔転移に対しては主に腫瘍内科で化学療法（± 放射線療法）を行った。原発巣再発に対しては①手術、②再照射（化学放射線療法含む）、③サイバーナイフを単独ないし組み合わせて行ったが、治療による合併症や再再発が少なからず見られた。これらの症例に対し、今後の治療の参考とすべく、各因子別の治療成績の他、再発率、再発部位、salvage 治療の適応や合併症などにつきまとめ、若干の文献的考察を加え報告する。

6. 当科における上咽頭癌症例の検討

岩手医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科

阿部俊彦、福田宏治、桑島 秀、水川敦裕、大塚尚志、小田真琴

嶋本記里人、片桐克則、川岸和朗、館田 勝、志賀清人、佐藤宏昭

1985 年から 2010 年までに当科に入院治療した上咽頭癌 61 例について臨床検討を行った。臨床期分類は 2005 年の頭頸部癌取扱い規約に従った。男性が 45 例、女性 16 例、年齢は平均 57 歳(18~83 歳)であった。全体の 5 年、10 年、15 年生存率はそれぞれ 53%、39%、33% であった。T 分類別では T1 : 18 例、T2 : 13 例、T3 : 15 例、T4 : 15 例で、5 年粗生存率はそれぞれ 26%、79%、59%、40% であった。N 分類別では N0 : 15 例、N1 : 16 例、N2 : 23 例、N3 : 7 例で、5 年粗生存率はそれぞれ 90%、56%、38%、34% であった。ステージ分類は I : 3 例、II : 11 例、III : 26 例、IV : 21 例で、5 年粗生存率はそれぞれ 50%、79%、59%、38% であった。N 分類で有意差を認めた。T1 は 83% にリンパ節転移を認めたのが予後不良の原因と思われる。ステージ I は 3 例中 1 例が 5 年を待たずして死亡している為に予後が不良となっているがその他は概ね予想通りの結果であった。

7. 当科における上咽頭癌の治療成績

秋田大学大学院医学研究科耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座

小泉 洋、本田 耕平、近江 永豪、鈴木 真輔、佐藤 輝幸、石川 和夫

当院では上咽頭癌症例に対する一次治療として 2001 年から CDDP/5FU と放射線治療の交替療法を施行している。今回我々は 2001 年から 2010 年の 10 年間に当科で加療した上咽頭癌 21 症例（男性：17 例、女性：4 例、平均 64.8 歳）について検討を行った。病期は、Stage I が 1 例、Stage II B が 2 例、Stage III が 12 例、Stage IVA が 4 例、Stage IVB が 1 例、Stage IVC が 1 例であった。

Stage I に対しては約 60Gy の照射を施行し、Stage II 以降の症例に対しては放射線治療と化学療法による交替療法を施行した。5-FU(800mg/m²/day)5 日間、CDDP(50mg/m²/day) 2 日間投与後引き続き 30～36Gy を照射し、同様に 2 回目の化学療法後さらに合計 66Gy を目安に 2 回目の照射を施行して、可能な症例に対しては 3 回目の化学療法を施行した。交替療法を施行した 20 例中、3 回の化学療法を完遂できたのは 10 例（50%）であり、他の 10 症例は 2 回目の照射で治療を終了した。

本治療法による 5 年粗生存率は 81.5%、疾患特異的 5 年生存率は 86.5% であった。死亡例は 4 例で、遠隔転移による原病死が 2 例、他疾患による他因死が 1 例、事故による他因死が 1 例であった。

CDDP/5FU を用いた化学療法と放射線治療の交替療法の治療成績は良好であり、有用であると考えられる。

8. 弘前大学における上咽頭癌の治療成績

弘前大学 耳鼻咽喉科

阿部尚央 南場淳司 佐々木亮 武田育子 白崎隆 松原 篤 新川秀一

今回我々は、2000 年から 2009 年までの 10 年間に当院を受診し一次治療を行った、上咽頭癌 21 例について検討を行った。性別は男性 15 例、女性 6 例で、年齢は 35 歳から 79 歳（中央値 57 歳）であった。治療開始時の病期分類（頭頸部癌取扱い規約改定第 4 版）は stage I : 2 例、IIb : 3 例、III : 4 例、IVa : 8 例、IVb : 3 例、IVc : 1 例と、76.1%が進行癌であった。また病理組織学的には低分化型扁平上皮癌が 13 例、中分化型扁平上皮癌が 2 例、未分化癌が 5 例、粘表皮癌が 1 例であった。

治療は stage I の粘表皮癌 1 例に手術が行われ、他の 20 例には放射線照射を主体に化学療法を併用して行われた。PS 不良例 1 例と精神疾患の既往のある 1 例は放射線単独で治療された。また残存リンパ節転移に対する頸部郭清術が 3 例に行われた。

治療効果は原発巣では CR18 例、PR3 例であり奏効率は 100% であった。再発・転移は 6 例に認められた。5 年生存率は 58.6% であり、2000 年に本研究会で報告した 35.7% を大きく上回る結果となった。1999 年までの治療は放射線治療が主体で、症例に応じて化学療法を併用する方針であったが、2000 年以降の症例ではほぼ全例に化学療法が併用されるようになり、これが生存率の改善に寄与したものと考えられた。

当院での上咽頭癌に対する併用化学療法は、ほとんどの症例で低用量の CDDP が用いられており、今後さらに生存率を改善させるためには化学療法の見直しを行う必要があると考えている。

9. 北海道がんセンターにおける過去 10 年間の上咽頭癌治療の検討

北海道がんセンター

頭頸部外科 洲崎 真吾、瀧 重成、永橋 立望、田中 克彦

放射線科 森 崇、藤野 賢治、西山 典明、西尾 正道

【目的】当院における上咽頭癌新鮮例に対する治療成績の検討。

【方法】今回我々は 2000 年 1 月から 2009 年 12 月までの 10 年間で上咽頭癌と診断され当院で一次治療を行った症例につき臨床的検討を行った。対象は 22 例で男性 18 例、女性 4 例。年齢は 34 歳～78 歳（中央値：53 歳、平均値 56.8 歳）。病期別には II A : 1 例、II B : 7 例、III : 7 例、IVA : 3 例、IVB : 2 例、IVC : 2 例と進行癌が多かった。組織型分類は WHO-type I が 3 例、type II が 10 例、type III が 9 例。観察期間は 4 ～ 132 ヶ月（中央値：72 ヶ月）であった。治療法としては 1 コース目に CDDP 単剤、2 コース目に CDDP+5-FU (PF 療法) を同時併用する化学放射線療法を行い照射終了後補助療法として PF 療法を 2 コース施行し標準治療として行った。ただし、2 例で化学療法と放射線治療との交替療法を行った。全例で根治照射線量 66Gy 以上を完遂（66Gy～71Gy）。【成績】治療成績は 1 例が SD、3 例が PR、その他 18 例で CR を得られた。5 年粗生存率は 67.1%。観察期間中に再発を認めたものは 4 例であった。

治療法、再発様式、再発治療等につき検討したので若干の文献的考察を加えて報告する。

10. 当科における上咽頭癌症例の検討

札幌医科大学医学部耳鼻咽喉科

黒瀬 誠、近藤 敦、氷見徹夫

当科における現在の上咽頭癌の治療方針は、1期に対しては主に放射線治療（66～70Gy）、2期、3期、4期に対しては白金製剤及び5-FUを用いた化学放射線同時併用療法（66～70Gy）を行い、可能な範囲で補助化学療法（白金製剤+5-FU）を2～3コース追加している。

今回我々は当科において一次治療を行った上咽頭癌症例について検討した。対象は2000年1月から2009年12月までの10年間において一次治療を行った34例とした。年齢は17歳から85歳で平均59.8歳、性別は男性が27例で女性が7例であった。病期分類の内訳は1期が1例、2A期が1例、2B期が6例、3期が9例、4A期が12例、4B期が2例、4C期が3例だった。これらの症例に関して病期分類、T分類、N分類、組織型などの因子における生存率等を解析し検討したので報告する。

1 1. 北海道大学病院における上咽頭癌の治療～10年間（2000–2010）のまとめ

北海道大学病院放射線治療科

*1 北海道大学医学部保健学科 *2 札幌厚生病院放射線科

*3 帯広厚生病院放射線科 *4 砂川市立病院放射線治療科

*5 北海道大学病院耳鼻咽喉科 *6 北海道大学病院腫瘍内科

土屋和彦 安田耕一 西川由記子 木下留美子 鬼丸力也 原田慶一

井上哲也 加藤徳雄 清水伸一 白土博樹 西岡健^{*1} 鈴木恵士郎^{*2}

田口大志^{*3} 長谷川雅一^{*4} 折館伸彦^{*5} 本間明宏^{*5} 鈴木清護^{*5} 畠山博充^{*5}

加納里志^{*5} 水町貴諭^{*5} 坂下智博^{*5} 福田諭^{*5} 竹内啓^{*6} 田口純^{*6}

【背景・目的】当院では上咽頭癌の治療は化学放射線治療を原則としている。今回 2000–2010 年の 10 年間について検討した。治療方針の大きな変化は 2 つ。①同時併用 化学療法の変化：2000 年 4 月–2005 年 12 月までは CDDP/5-FU 併用、それ以降は weekly CDDP (wCDDP) 併用。②IMRT の導入：2000–2004 年までは 3DCRT, 2005 年以降は原則 IMRT。今回併用化学療法の違いにおける治療成績、および IMRT 導入による照射後口腔内乾燥症の変化について検討を行った。対象は CDDP/5-FU 群、wCDDP 群とともに 25 例の計 50 例。

【結果】観察期間は CDDP/5-FU 群 7–118 ヶ月（中央値 71）、wCDDP 群 8–62 ヶ月（中央値 34）。wCDDP 群の方が stage II の症例数が多く III が少なかった。3 年全生存率、局所制御率及び無増悪生存期間はそれぞれ CDDP/5-FU 群で 84, 82, 58%、wCDDP 群で 90, 72, 49% でいずれも 2 群間に有意差は認めなかった。患者を IMRT と 3DCRT の 2 群に分けて解析した場合有意差はないが IMRT 群の方が成績は優れている傾向にあった。急性期有害事象は CDDP/5-FU 群に比し wCDDP 群は皮膚炎は軽度、白血球減少の頻度が高い傾向にあつた。照射後口腔内乾燥に関しては IMRT 治療例の方が 3DCRT に比し軽度である傾向が認められた。【結論】wCDDP 併用化学放射線治療は CDDP/5-FU 併用と比較し有意差はないものの局所制御率及び無増悪生存期間が劣る傾向にあった。IMRT により口腔内乾燥は軽度となる傾向があつた。

12. 当科における上咽頭癌の治療成績

旭川医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科

高原 幹、長門 利純、岸部 幹、片山 昭公、
國部 勇、片田 彰博、林 達哉、原渕 保明

当科で2001年1月から2011年1月までの10年間の間に治療した上咽頭癌22例(男性19例、女性3例、年齢22-82歳、中央値65歳)について検討した。22例中13例(59%)は側壁型であり残りの9例(41%)は後上壁であった。またWHOによる病理分類ではII型が16例(73%)であり、残りの6例(27%)はIII型であった。T分類はT1:6例 T2a:3例 T2b:4例 T3:2例 T4:7例、N分類はN0:2例 N1:4例 N2:14例 N3a:1例 N3b:1例、M分類はM0:21例 M1:1例であった。病期分類ではIIb期:3例、III期:10例、IVa期:7例、IVb期:1例、IVc期:1例であった。当科では2000年から不破らの原法に準じた化学放射線交替療法を原則的に行っており、22症例中15例に施行した。それ以外では、2症例が動注化学放射線療法を、1症例が化学放射線同時併用療法を、4症例が高齢や合併症などにより放射線療法単独で治療を行った。全体の5年粗生存率は63.7%、5年無増悪生存率は66.4%であった。交替療法を施行した15例においては、5年粗生存率は85.7%、5年無増悪生存率は78.6%であった。以上の結果をふまえ今後の治療方針などについて臨床的検討を加え報告する。